第3種郵便物認可

展評

宮城　篤正

9/26

国展工芸沖縄展

熟達の技法 優品一堂に

去年、90回記念国展工芸沖縄展のプレイベント「国画会工芸部沖縄支部展」が開催された折に作品を観て会員たちの意気込みに感動した。その時、ふと国展における沖縄側の作品の位置付けを知りたいと思った。

今年、沖縄初開催となり期待に胸を弾ませながら、初日会場に足を運んだ。まず、染織作品の数の多さと大きさ、それに個性豊かで鮮やかな色や形の作品が会場全体を明るく包み込んでいたのに圧倒された。また作品を美しく見せるための展示方法や会場構成にも十分気が配られていた。おそらく国展工芸部の展示コンセプトの伝統が今に引き継がれてきていると思われる。

今回は染織作品評は他に譲るとして筆者は陶芸、木工、漆、ガラスの作品について寸評する。地元沖縄側の陶芸会員の作品はこれまで「沖展」出品作を観てきた。しかし、90回記念でしかも沖縄初開催とあって、それぞれが一層力を入れて制作した作品が並んでいる。

そこで沖縄側の作品から順不同で述べると島袋常秀の「赤絵草文皿」がトップに展示されていた。彼の得意とする大皿にのびやかな筆致で赤絵草文を描いた作品。次に松田共司の「白土点打大皿」が今回さらに特大サイズであり、彼の並々ならぬ意欲を感じた。ダイナミックな点打技法に落ち着いた色調、焼成も上々の出来栄えで迫力満点の作品である。

一般、初出品での新人賞を受賞した新垣寛の「刷毛打皿」も見応え十分である。彼は今年の「沖展」で準会員賞を受賞した白化粧掻き落とし技法の大皿とは全く違った作風で一瞬筆者は意表を突かれた。

新垣修は「美ら海」の大皿を出展した。彼のオリジナルデザインで、白化粧の上にコバルトで無数の丸紋を描きその中に線彫り菱形魚文を配し丸紋以外の空白部分は緑釉で塗りつぶす。この作業は根気と手間をかけて仕上げるので、会場でも目を引く作品である。

次に県外作家の筆者なりに注目した作品を列挙する。瀧田史孝の「影青磁唐草文大壷」は端正な形に熟達した技法が冴え、白磁の美しさを存分に発揮した完成度の高い作品である。彼はこれまで何回となく沖縄で個展を開催した陶芸家である。阿部眞士の「白磁手付壷」も白磁の特色を際だたせた作品。佐久間勝也の「黒釉面取花瓶」は面取りに三耳を付けてバランスをうまく調和させている。今年新会員推挙山下清志の「海鼠釉盛絵壷」は実に堂々とした造形が印象的である。

本土各地には木材の種類が豊富にあり、古くから木工芸が発達してきた歴史がある。樣もその中の代表的素材のひとつで、昔から広く建築や家具調度等に使用されてきた。木工・漆では松崎融の「樣拭漆縁朱輪花盆」に注目した。樣は大木に成長し、その材は固く、木目の美しさは定評がある。盆面は拭漆で木目の美しさを際だたせ、縁の12弁を朱漆を塗った力強い作品である。山形満の「拭漆樣厨子」も上手に木目の美しさを生かしている。ガラスでは準会員村松孝の「蝸牛文様硝子鉢」を挙げたい。ガラスの特徴である透明性を重要視した爽やかな作品に仕上げている。

特別展示には国展工芸部創設に関わった富本憲吉、その後を引き継ぎ発展させた民芸作家たちの黎明期の名品が展示され、まさに圧巻である。戦前から沖縄の工芸と縁の深い優品が一堂に展示され、鑑賞できる機会はめったにない。国展には戦後の壺屋焼をリードした金城次郎、新垣栄三郎、小橋川永昌（壺屋三人男）も会員であった。濱田庄司、河井寛次郎、バーナード・リーチ等の作品の中にあって沖縄カラーを際だたせる存在であることを改めて確認できた。このことは現代の沖縄の染織や陶芸家たちの作品についても同様にいえよう。沖縄の工芸、とりわけ染織や陶芸分野が民芸作家と相互に影響を与え合った事実、また私たち県民が沖縄の文化や工芸の良さを再確認する機会にもなった事は大きな収穫であった。

（工芸研究家）

国展工芸沖縄展 陶・木工・漆・ガラス

国展工芸沖縄展より展示風景＝那覇市おもろまちの県立博物館・美術館